



Title	デュッセルドルフ大学インターン報告書
Author(s)	加藤, 紗雪
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 25-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95465
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デュッセルドルフ大学インターン報告書

加藤 紗雪

1. はじめに

本稿は、2022年10月から2023年7月にドイツのデュッセルドルフにあるデュッセルドルフ大学（正式名称ハインリッヒ・ハイネ・デュッセルドルフ大学）の現代日本学科（Modernes Japan 以下 Moja）にて行われた、日本語教育実習の報告である。

デュッセルドルフはドイツ西部に位置するノ르트ライン・ヴェストファーレン州の州都である。また、日系企業が多く集まり、日本人が多い町として有名な都市である。

2. 日本語教育実習の概要

実習期間は約10ヶ月、2学期間である。教育実習生（以下実習生）として、主には授業のティーチングアシスタント（以下TA）を行っていた。指導教員となっていたいただいた日本人の常勤の日本語教師の先生がおり、実習生はその教員の指導のもと様々な業務にあたっていた。今回の実習は実習生2名で

行い、後述の2.3 教壇実習では交代制で授業を行なった。

ここでMojaの概要について述べておく。Mojaの日本語主専攻の学生は2年間にわたり日本語を学習する。1年生の授業の前期を日本語Ⅰ、後期を日本語Ⅱ、2年生の前期を日本語Ⅲ、後期を日本語Ⅳとし、全ての学期末試験に合格しなければならない。また、日本語Ⅱまでは日本語が副専攻の学生も履修することができる。

学年ごとにクラスが分けられており、各クラスは20名前後であった。2022年秋冬学期～2023年春夏学期では、1年生は4グループ、2年生は3グループであった。添付の表1は2022年10月～2023年2月の前期の時間割である。実習生は1・2年生の授業に加えて、秋冬学期のみ「アカデミックジャパニーズ」という大学院のコースの授業にも参加していた。

具体的な業務については、次の2.1 授業TA、2.2 宿題添削、2.3 教壇実習で述べる。

	月	火	水	木	金
8:30-10:00	日本語ⅠTA (三村・加藤)	日本語ⅢTA (加藤)	日本語Ⅰ 教壇実習 (加藤・三村)		日本語ⅢTA (三村)
10:30-12:00	日本語ⅠTA (加藤・三村)	日本語ⅢTA (三村)	日本語Ⅰ 教壇実習 (加藤・三村)		日本語ⅢTA (加藤)
12:30-14:00				アカデミック ジャパニーズTA (加藤・三村)	日本語ⅢTA (三村)
14:30-16:00		日本語ⅢTA (加藤)			

表1 実習生の時間割 (2022年10月～2023年2月)

2.1 授業TA

TAとして参加した授業は、秋冬学期の日本語Ⅰ（1年生）、日本語Ⅲ（2年生）、春夏学期の日本語Ⅱ（1年生）、日本語Ⅳ（2年生）、春夏学期のアカデミックジャパニーズ（修士課程）である。

日本語Ⅰ～Ⅳでは、学生の間を歩き、誤字や発音、表現などのチェック、ペアワークの相手、質問対応などを行った。また、会話練習の手本を見せる際の先生の相手役をやったり、命令形の授業では悪者に扮する劇をしたり様々な形で授業に参加した。

この TA の活動を通して、現場の日本語教授法を体感することができ、授業の進め方や学生の雰囲気などを知ることができる貴重な機会になった。

週に 1 回の修士課程の授業では、大学院生のプレゼンの準備を手伝い、プレゼンの感想や改善点について話した。グループワークの際は、発音やイントネーション、表現を訂正したり、グループワークのファシリテーターのようなことを行ったりもした。

2.2 宿題添削

学生たちは、ほとんど毎日宿題プリントが課され、他にも翻訳課題や、数は少ないが不定期で作文の課題もあった。学生たちは宿題を ILIAS という大学専用のサイトにアップロードし、私たち添削チームはそれを自前のタブレットとペンを使って添削し、再アップロードするという形式をとっていた。添削チームの主なメンバーは、常勤・非常勤の先生、実習生であった。

学生たちは、添削チームのフィードバックを受けて試験に挑むため、宿題の記録や添削の責任は大きく、そのため少しでも引っかかる部分がある場合は添削チーム全員に宛ててメールを書くように言われていた。実際にチームで相談した例では、生徒が Chat GPT や DeepL などを使って翻訳課題をやっているのではないかという点についてや、設問が不適切だったのではないかという疑問についてや、間違いとまでは言えないが、違和感のある表現を相談する場合などがあった。

はじめの頃は、添削自体に慣れていない上に、電子機器・システムなどの使い方の要領がわからず、さらに 2 学年分（約 160 名）の添削をする必要もあったので、スムーズにできるようになるまでに多くの時間がかかってしまった。しかし、次第に慣れてくると添削業務を通して、学生たちによくある間違いや学生がそれぞれ得意な部分などを知ることができ、授業にも生かすことができた。時々ドイツ語の影響を受けた日本語の間違いや見られる時があり、自分のドイツ語の勉強にもなり興味深かった。

さらに、特に作文添削では、自由度が高いぶん学生の様々な一面を知ることができ、コミュニケーションの種になった。そして、課題の添削を通して学生たちの頑張りや成長を見ることができ、自身のモチベーションアップにもつながった。

2.3 教壇実習

教壇実習は、毎週水曜日の日本語 I（全 4 クラス） 1, 2 限を担当させていただき、もう 1 人の実習生と 2 クラスずつ交代で行った。

教材は『みんなの日本語初級 I』『みんなの日本語初級 II』（スリーエーネットワーク）を使った。

授業内容はアウトプットが中心であった。学生は授業の前に文法ビデオを見てくることになっており、授業で取り扱う範囲の文法説明は私たち実習生の授業の前に受けているため、文法説明は振り返りとして軽く行い、授業の大半を練習問題や文型練習、アクティビティなどの時間に使った。

授業は直接法ベースで進めた。しかし、文法用語や未習の語彙についてはドイツ語を使った。また授業の中での指示出しや質問への回答、理解チェックの簡単な翻訳作業などは時々ドイツ語で行なった。

教案は毎回授業を行う前の週の金曜日までを期限として作成し、指導教員に提出して、フィードバックを受けていた。指導は隔週で藤田先生と浜津先生に担当していただいていた。週ごとの授業計画が示された授業計画表が 1~2 週間ほど前に配られ、そこに担当範囲が提示されていた。毎週それに沿って教案を作成した。そして、フィードバックを受けたら授業までに修正を加え、授業で用いるパワーポイントを作成した。

授業では、その週に教案を添削してくださった先生ともう 1 人の実習生にサポートとしてついてもらい、授業後、改めて先生と実習生から授業に関してのフィードバックをもらうことができた。フィードバックでは、スライドの効果的な使い方や授業の構成、ペアワークの指示の出し方や例文の妥当性など、さまざまな視点でアドバイスをたくさんいただくことができ、毎回たくさんの発見があった。

3. 年間スケジュール

10 月	入寮・秋冬学期の始まり
2 月	秋冬学期 期末試験
春休み中	ブロックコース
4 月	春夏学期の始まり
5 月	日本デー
7 月	退寮
8 月	春夏学期 期末試験

3.1 ブロックコース

春休み中にブロックコースと呼ばれる集中講座が開講される。これは希望者のみが参加する2日間の講座であり、私たち実習生は1年生のブロックコースを担当した。文法・語彙・表現の面では『みんなの日本語初級』第1～17課で扱ったものの復習になるような活動が必須で課され、漢字の面では13課までの復習、休暇中課題である14課の確認が必須で課されたが、具体的に取り扱う学習内容や時間配分、アクティビティの内容などは全て実習生の2人で話し合っ決定した。

以下はブロックコースの大まかな実施内容である。復習したい事項を効果的に使えるようなアクティビティ作りを心がけた。

	1日目	2日目
9:30 ~10:30	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介 春休みにしたことをSNSのフォーマットを使って書いてみよう kahoot!クイズ大会 	<ul style="list-style-type: none"> フルーツバスケット カタカナの書取り 早口言葉
10:45 ~11:45	<u>テ形復習</u> <ul style="list-style-type: none"> 折り紙 歌詞のディクテーション 	漢字の復習 <ul style="list-style-type: none"> リバーゲーム 漢字書写リレー
11:45 ~12:45	昼休み	
12:45 ~13:45	<u>数字と助数詞</u> <ul style="list-style-type: none"> 数と助数詞の復習 お金カルタ 日本語で注文してみよう 	<u>ナイ形、テ形</u> ・ すごろく
14:00 ~15:00	<u>てから、からまで</u> <ul style="list-style-type: none"> 日本へ旅行に行く 	<ul style="list-style-type: none"> オノマトペを知ろう

3.2 日本デー

デュッセルドルフでは毎年5月末にJapan Tag (日本デー)と呼ばれるイベントが開催される。私たちは藤田先生の紹介で、この日本デーにおいて、ボーフム大学のブースでお手伝いをさせていただいた。お手伝いの内容は、来場者の名前をカタカナで筆で短冊に書き、プレゼントするといったものであった。普段はMojaの学生たちとしか交流がなかったが、この活動を通して、普段交流することができない、さまざまな年齢層の日本に興味がある方々と交流することができ、楽しかった。このイベントには日本や日本語に興味がある方々がたくさん来場しており、終始とてもフレンドリーで和やかな雰囲気だった。

3.3 試験監督補助

2月と8月の期末試験では試験監督の補助業務なども行なった。

4. 授業外での活動

授業外の活動としては、チュービンゲン大学で行われた日本語教師のワークショップに参加したことが挙げられる。このワークショップは、阪大の卒業生であり現在はチュービンゲン大学で日本語教師をいらっしやる三輪さんと濱田さんの発案で開かれ、ドイツに研究滞在中の阪大名誉教授である真嶋先生がゲストスピーカーとして登壇されていた。講演では、日本語教育が抱えている問題点解決のための法整備に最前線関わっていらっしやる真嶋先生のお話を聞くことができ、大変興味深かった。そして、ワークショップでは、ドイツで日本語教師として働く先輩方と交流することができたり、授業の目的に沿った授業ができているかをもう一度考え、授業案をブラッシュアップする体験などができ、とてもためになった。

また、阪大の卒業生で元実習生でもある細野さんの紹介でボーフム大学のLandesspracheninstitut (以下ヤポニクム) の見学をさせていただいた。ヤポニクムでは、さまざまな居住地や年齢の学生が短期間で集中的に日本語を学ぶクラスの見学をさせていただき、大学の授業とは別の形での日本語教育の形を学ぶことができた。ヤポニクムには、計2日間見学に行かせていただいたが、オンラインと対面の組み合わせで授業を行なっており、機材の使い方や

用意する課題を工夫したら、対面とオンラインの学生でのペアワークが可能なことを実感することができ大変勉強になった。

他にも、ドイツに住む日本人の子供たちの交流の場を支援するボランティアに行っている実習生や学生もいた。大学の日本語教師以外にも、さまざまな形で日本語教育を支えている方々がいることがわかり、とても勉強になった。

5. 現地の生活

実習生はデュッセルドルフ大学の留学生として在籍するため、無料で大学の語学の授業をとることができた。そのため、私は週5、6コマほどドイツ語の文法やコミュニケーション、作文や発音の授業をとっていた。毎学期の初めにドイツ語のプレイスメントテストがあり、そこで割り振られたレベルに応じて自分に必要なさまざまなコースを選択することができ、そのコースの中で、さまざまな国籍や背景を持つ仲間達とドイツ語を学ぶことができた。

また、ドイツ語以外にフランス語やスペイン語、韓国語や中国語などの語学コースもあり、そこでドイツが母語の学生とも交流することができた。私は韓国語 A2-2 と中国語 A2-2 の授業をとっていた。韓国語は韓国語の直接法での授業、中国語はドイツ語を媒介語としての授業であった。

日本語学習者との交流の機会については、季節ごとに Moja の学生主催のクリスマスパーティーやカラオケパーティーがあった。また、シュタムティッシュという Moja の学生主催の交流会のようなものが毎月開催されており、そこでは Moja の学生と飲み屋のテーブルを囲みながら、時に日本語で、時に英語で、時にドイツ語でいろいろな話をするこ

うことができた。主催が Moja ではないシュタムティッシュもあり、そこには Moja の学生だけでなく、ドイツ在住の日本人や日本企業のドイツ駐在員、大学外のドイツ人日本語学習者などさまざまな人が参加していた。

6. 最後に

日本で日本語教育経験が一切無いままの渡航で不安なこともたくさんあった。また、私が至らなかったせいで各所にご迷惑をおかけすることもたくさんあった。日本に帰ってから、日本語教師の非常勤のアルバイトを始めて、もっと改善すべきだったところや準備不足だった点に気づくことが多々あり、自分の至らなさに落ち込む日々だが、そんな時は、先生やもう1人の実習生の三村さん、そして学生のみんなからかけてもらった温かい言葉を思い出すと、また頑張ることができる。今後、常勤の日本語教師になれるかはわからないが、この実習を通しての経験は、自分の人生の中でかけがえのない宝物になったように思う。

最後に、この機会をくださり、日本から温かく送り出してくださった筒井先生、櫻井先生をはじめとする日本語専攻の先生方や指導教員の儀利古先生、そしてドイツで様々なことを教えてくださった藤田先生、浜津先生、小出先生をはじめとする Moja の先生方、生活面や書類面で大変お世話になったチューターや学生、授業を通して関わってくれた全ての Moja の学生、大学院を目指すきっかけを与えてくれ実習生の先輩でもある細野さん、ともに切磋琢磨したもう1人の実習生の三村さん、ドイツ滞在に関わった全ての人たちに感謝申し上げます。本当にお世話になりました。ありがとうございます。